

『枕草子』に見る四季の美

山 元 礼

はじめに

「春はあけぼの」ではじまる枕草子の冒頭の段は大変有名である。自然及びこれにとりかこまれた人間の生活を、春夏秋冬の四季の別において見ており、しかも、各々の季節で一日のうちで最もよいとする時間帯を挙げ、その情趣について述べている。なぜ春はあけぼのなのか、なぜ夏は夜がいいのか、興味深い。また、枕草子では四季をどのようにつまえているのだろうか。作者の考える四季の美とは何だろうか。季節ごとに諸段にあたり見ていきたい。その場合、初段で美の表象として用いられている「をかし」と「あはれ」の語に注意して研究を進めていく。

初段は、作者が四季折々の自然を描くにあたってまずその総序というかたちをとっている。この段について研究することは、作者が記すすべての章段の、枕草子全体の研究

の基盤になると思う。そのような意義があることを頭において考察していきたい。

一 春

春はあけぼのの空を言う。日の出直前の空の描写だが、そこにたどりつくまでの静かな微妙な時間の移りかわり、白、赤、紫と変化する色彩、視覚の美が、この段の特徴として挙げられる。

では、別の段では作者は春をどのように捉えているのだろうか。なぜ「あけぼの」なのかという疑問と合わせて諸段にあたってみる。

1. 諸段に見る「春」——節供を中心に——

春の節供についての記述がいくつかある。

正月一日は、まいて空のけしきもうらうらとめづらし

う、霞みこめたるに、世にありとある人は、みな姿、かたち心ことにつくろひ、君をもわれをいはいはひなどしたる、さまことにをかし。

七日、雪間の若菜摘み、青やかにて、例は、さしも、さるもの目近からぬ所に、もてさわぎたるこそをかしけれ。

(三段)

人々の服装や容貌、行動がいつもと違い、宮中でもあまり見慣れない若菜を珍重するなど、年明けだからこそ普段とは違う雰囲気があり、新鮮さとか目新しさ、期待などが感じられ、それを「をかし」と言っている。

三月三日は、うらうらとのどかに照りたる。桃の花の今咲きはじむる。柳などをかしきこそさらなれ。それ
もまだ、まゆにこもりたるはをかし。ひろごりたるは
うたてぞ見ゆる。

(同段)

右は同段の三月の節供の記述である。満開の花よりも、咲いたときの美しさを想像させ期待をもたせる咲きははじめの花を好み、柳もひろがっているのは不愉快とまで言い、まだ芽ぐんだばかりで十分にひろがらないさまを「をかし」と評する。

常よりことに聞こゆるもの 正月の車の音。また、鳥の声。

(一一一段)

この段は能因本では「正月」を「元三」としている。元日の車の音は、新年における人間の活動の開始を意味し、鶏の声は新しい年を喜び告げるかのように聞こえる。これらが普段より特別な感じに聞こえるのは、やはり「元日」だからであり、今まさにはじまる、前途への期待、喜びに満ちている。

以上をまとめると、「春」はうららかでのんびりと、清新・新鮮な感じがするもの、また、これからまさにはじまる、喜び、期待を抱かせるものと作者は捉えている。――Ⅰ

2. 「あけぼの」と「春」

それでは最後に「あけぼの」について考えてみたい。

「あけぼの」とは、夜がほのぼのと明けはじめの頃、^(注1)物事の始まりのころをいう。^(注2)また、一般的に期待や活力を抱かせるものと捉えられる。これは、先にⅠで述べたことと共通な点が多い。作者は、一日のうちで、「あけぼの」という時間帯に一番春らしさを感じ、「春はあけぼの」と言いきったのではないだろうか。

「春」の美とは、「をかし」の美と言えるのではないだろうか。

二 夏

夏は、月夜、闇夜、それに雨の夜まで挙げて、夜ならはいつでもよいと言っている。^(注3)

似たようなものとして次の段がある。

月のころは、寝おどろきて見出だすにいとをかし。闇もまたをかし。
(三四段)

七月の残暑の夜の場面である。やはり、月夜、闇夜を賞賛している。

では、なぜ作者は「夏は夜」と言ったのだろうか。また、諸段では「夏」をどのように描いているのだろうか。

1. 作者の考える「夏」——初段に見る「美」——
冬は、いみじう寒き。夏は、世に知らず暑き。

(二四段)

作者は極寒、酷暑を好んでいる。一般に、酷暑、極寒は嫌われるところであるが、夏は夏らしく、冬は冬らしくあるのがよく、それでこそ季節の本当の美しさが感じられると言うのだらう。確かに、初秋や早春はそれを経過してこそ喜びが大きいし、酷暑に限って言えば、その夜の涼感を考えると、昼間の暑さからの開放でなんとも言えない気持ちになる。

ちになる。

そのような夜、「月のころはさらなり」と言う。ここで「月」について考えてみたい。

七月七日は、曇りくらして、夕方は晴れたる空に、月いと明かく、星の数も見えたる。
(八段)

七月ばかり、いみじう暑ければ、よろづの所あけながら夜も明かすに、月のころは、寝おどろきて見出だすにいとをかし。
(三四段)

前段は七夕の空の様子である。この段は五節供それぞれの季節美について述べているのであるが、夏(残暑)については「月」を取り上げる。古来より「月」と言えば「秋」であり、秋の歌に詠まれるものだが、清少納言は「夏」に月をもつてきている。既成概念にとらわれず、独自の感覚で美を描いている。

後段は先にも挙げたものである。たとえ寝苦しくて目が覚めても、外を見れば月が冴えわたり涼しく感じる、と言うのだらうか。

作者が夏に「月」をもってきた理由として、このような精神的な清涼感を得られることに「夏」の美を見出したことが考えられるのではないか。

また、月のない時分——闇夜も挙げている。そこでは

「夏」を感じさせる蛩に魅せられている。たくさんの蛩が入り乱れて飛びかっているのも、一、二匹がほのかにかすかに光って飛んで行くのも、どちらも黒と黄色の色彩の醸し出す情景は幻想的であり、夏夜の涼しさを誘う。また、このような光景に闇夜そのものの呼吸づいていような生(注4)命感を楽しんでいるのであろうか。それを「をかし」と評している。

では「雨」が降るのはなぜ「をかし」なのだろうか。先に挙げた二七四段に、

雨は、心もなきものと思ひしみたればにや、かた時降るものとにくくぞある。(二七四段)

とあるように、「雨」は、風情に乏しいものと思いこんでいるせいか、しばらくの間降るのもひどくにくらしい、と言っているし、また同段で、

をかしき事、あはれなる事もなきものを。(同段)

と、雨の夜はおもしろみも情趣もないと思っている。よって作者は「雨」を嫌っているのがわかる。

しかし、一般に「雨」には浄化作用があると言われる。日中の熱気を洗い流してくれるような「雨」に、夏の夜だからこそ「をかし」と感じたのではないだろうか。これは、盛夏の夜であればこそで、真昼との対照の中の「夏」の美

である。

以上、初段について見てきたが、最後になぜ「夜」を取り上げたのかについてまとめておきたい。作者のいる京の四季は、その気温において寒暑の差が実にきびしい(注5)。夏の日は暑く、酷暑と言うべきむしろ暑さである。ゆえに、夜がひとしおに心待たれ暑さからの開放感、安らぎ、清涼感を得る。そのような時、月や蛩、雨などの視覚の美を発見するのである。猛夏ゆえに招来される美の諸相を享受して評価(注6)、称揚しようとする姿勢が見られる。「夜」は、「夏」の美を感じるのに最適な時間帯だと考えらるのである。その背景には、「夏は、世に知らず暑き。」という夏は夏らしくあるところに本当の「夏」の美が感受されるという作者の信念がある。

2. 一日の中の「夏」の美

先には初段に沿って「夜」の美を見てきた。しかし、「夏」の美を感じるのには夜が「最適」というだけでその他の時間帯にも見ることができ。次は「夕方」について述べたものである。

いみじう暑きころ、夕涼みといふほど、物のさまなどもおぼめかしきに、男車の、さき追ふは、言ふべきに

もあらず、ただの人も、後の簾上げて、二人も、一人も、乗りて走らせ行くこそ、涼しげなれ。まして、琵琶かい調べ、笛の音など聞こえたるは、過ぎていぬるもくちをし。——略——いと暗う、闇なるに、さきにともしたる松の煙の香の、車の内にかかへたるものをかし。

(二〇八段)

車に乗っているその内部から、空気の感触、音、香りなどの感覚の美を鋭く細かに捉えた一段である。軽快な男車と楽の音、盛夏の夕暮れの涼しさの美である。また、闇夜では、松明を挙げているが、闇で視界が閉ざされているのだから松明の「光」の方に注意が向きそうなのに、車内でそれが香っている状態を「をかし」と言う。その香りは「闇」だからこそ一層強く感じられるのだ。これも初段で見た蛸同様、闇夜の美、「をかし」の美ではないだろうか。ただし、この段がたまたま夏の描写であって、松明の使用は夏に限ったことではないので、「夏の」闇夜の美とは言えないが…。

また、作者は、日盛りを避けたころにのみ夏の情趣を求めているのではない。

六月十余日にて、暑き事世に知らぬほどなり。池の蓮を見やるのみぞ、いと涼しき心地する。(三三段)

これは夏盛りのころの記述である。蓮の花ぐらいいは暑さを忘れることはできそうにないが、さわやかな自然の命に、また極楽を想像して、すこぶる暑い中でも涼しさを感じている。

いみじう暑き昼中に、いかなるわざをせむと、扇の風もぬるし、氷水に手をひたし、もてさわぐほどに、こちたう赤き薄様を唐撫子のいみじう咲きたるに結びつけて、取り入れたるこそ、書きつらむほどの暑さ、心ざしのほど浅からずおしはかれて、かつ使ひつるだにあかずおほゆる扇もうち置かれぬれ。(二八三段)

これも暑さの盛りの描写である。真つ赤な薄様の手紙に真つ赤に咲いた唐撫子と、たいへん暑い昼のさなかさらに暑くなるような色彩のとり合わせだが、贈り主の苦勞、自分への好意の深さを思うと、さわやかな気分になる。

三三段と合わせて、これらは夏の暑い日中での精神的な清涼感、「夏」の美ではないか。

3. 四季の中の「夏」の美

枕草子における「夏」の特徴の一つとして五月の描写が多いことが挙げられる。その中の一段として二〇七段を見ていきたい。

五月ばかりなどに山里にありく、いとをかし。草葉も水もと青く見えわたりたるに、上はつれなくて、草生ひしげりたるを、ながながと、たたざまに行けば、

下はえならざりける水の、深くはあらねど、人などの歩むに、走りあがりたる、いとをかし。(二〇七段)

青葉であたり一面真つ青な野原は、五月雨によつてつややかに洗い清められている。そこを供の者が徒歩で行くと下にたまつていた水が、ほとぼしり上がる。五月の山里の自然の持つ美しさ、色彩を鮮明に写し、「をかし」と結ぶ。宮廷の庭にはない自然の生命の輝きを満喫し、精神の開放を得ているのではないか。この段に代表されるように「夏」は、「春」の場合と違って作者は積極的に野面を求めているのが特徴だ。

4. 作者の視野

今まで「美」について見てきたが、作者は夏の景物をすべて賞美しているわけではない。

色黒う、にくげなる女のかづらしたると、鬚がちにかじけやせやせなる男、夏、昼寝したるこそ、いと見苦しけれ。(二〇五段)

わびしげに見ゆるもの 六、七月の午未の時ばかりに、

きたなげなる車にえせ牛かけてゆるがし行く者。——略——いと寒きをり、暑きほどなどに、下衆女のなりあしきが、子負ひたる。(二一八段)

これらとともに、貴族の目から見た記述であり、身分の低い者を否定的に見ているのがわかる。

以上、「夏」についてまとめると、夏は夏らしくあるところにごそ本当の「夏」の美が感受され、それは特に夜が最適であると言う。また、夕暮れや暑い日中にも自ら進んで美を見出している。「春」とは違い、より自然を求め、その中で解放感を味わっていることもわかった。そして、清少納言の「夏」に寄せる美意識が貴族的視界内のものであることも挙げられる。

三 秋

秋は烏と雁の対比が特徴的である。日暮れの静寂の中、近いがために大きく見える烏の断続的で不整な早い動きが視界から去ると、遠く小さな雁の列の整然と連続して緩やかな動きを見出だす。^(注10)

初段の「秋」の大きな特徴は、他の季節には見られない「あはれ」という言葉である。普通は「あはれ」の対象になり得ない烏を「あはれ」と評し、雁を「をかし」と区別

する。なぜそのように考えたのか。また、なぜ秋は「夕暮」を取り上げたのか、諸段にあたり検討していきたい。

1. 鳥と「あはれ」

まずはじめに「鳥」について考えたい。作者は鳥をどう捉えているのだろうか、諸段にあたり見ていく。その場合、「鳴き声」に注目してみたいと思う。

鳥のあつまりて飛びちがひさめき鳴きたる。(二六段)

これは、「にくきもの」の段の一部である。よってこの声は「あはれ」ではない。六九段「たとしへなきもの」として、

夜鳥どものゐて、夜中ばかりにいねさわぐ。落ちまどひ、木づたひて、寝起きたる声に鳴きたるこそ、昼の目にたがひてをかしけれ。(六九段)

と叙している。これは、鳥が昼間の抜け目のなさとは異なつたおもしろい姿を見せる夜の描写である。ここで「をかし」とあるが、それは「滑稽」の意味が強く、「あはれ」とは違う。

かならず来なむと思ふ人を、夜一夜起き明かし待ちて、暁がたに、いささかうち忘れて、寝入りにけるに、鳥のいと近く、かかと鳴くに、うち見あげたれば、昼に

なりにける、いみじうあさまし。(九三段)

右段は「あさましきもの」の段の一部である。あまりのことにあきれてしまつていて当然いい気分ではない。そんな時の鳥の鳴き声は「あはれ」とは言えない。

この他に、次の二段がある。

鳥の高く鳴きて行くこそ、顕証なる心地してをかしけれ。(七〇段)

さわがしきもの——略——板屋の上にて鳥の齋のさば食ふ。(三三八段)

前段は人目を忍んで逢っている場所において。夏は短夜のためすぐに明けてしまい、少ししか話をすることができない。もう少し言いたいことがあるからとお互いにあれこれ受け答えなどしていると、座っている真上から…。ひそかに逢っているのに、鳥がそれを見あらわしたように鳴くさまである。

後段では、かあかあと鳴いたり、板屋根にくちばしがあつたりするのをうるさいと言っている。

これらはどちらも「あはれ」ではない。

このように見てみると、作者は鳥の鳴き声を「あはれ」と評価していない。三九段「鳥は」に、

鳶、鳥などのうへは見入れ聞き入れなどする人、世に

なしかし。

(三九段)

とある。ここでは鳥は鶯と比較しておとしめられている。姿かたち、色、鳴き声まで決して万人に好かれるはずもない鳥をなぜ第一段では「あはれ」と言ったのだろうか。

ここで、内田暁子氏の論^(注1)によると、第一段の鳥の叙述は、漢学・漢詩の世界における鳥を踏まえたものであることが記されている。漢学・漢詩の世界では、鳥は「孝鳥也」と評され、親子や家族の情愛のあつい鳥として評価される。清少納言は、親子の情愛の深さを「あはれなり」と評していることを考えると、夕暮れ時、二、三羽ずつ飛んで行く鳥を見て、漢詩の中で触れていた鳥を思い浮かべ、それは親子、夫婦でねぐらに急ぐ姿であり、親の愛情・子の孝行に対して深い感動を覚えたのだろう。よって「あはれ」と言ったのではないかと述べてある。しかし、その他にも「あはれなり」と作者に思わせる要因はあると思う。一つには、鳥が飛び急ぐ背景、時刻である。夕日がもう山の端すれすれになっている情景はどこかもの悲しさを感じさせる。その中で鳥は日が暮れないうちに急いで帰ろうとする。その姿や、三羽四羽、二羽三羽……と、だんだんと数が少なくなっていくところに、秋の夕暮のさびしさや悲しさがあり、しみじみとした気持ちになって「あはれ」と言ったのでは

ないか。ただし、ここには鳴き声がないことをつけ加えておく。

以上、鳥について見てきたが、日本では普通嫌われるはずのものを取り上げ、見方をかえて「あはれ」と言うところに、清少納言ならではの斬新さがある。まして鳥でさえ「あはれ」なのだから、みなが評価する雁などは美しいのが当たり前であって、いと「をかし」なのだろう。そして、日が沈み、視界が闇ざされたことによつて聴覚がより研ぎ澄まされ、「風の音、虫の音」が聞こえてくるのだが、そのすばらしさも、古歌にたびたび見られるように、「はた言ふべきにあらず」なのである。

2. 作者の考える「秋」——「風」「虫」「月」の描写に見えるもの——

それではなぜ、先に見た描写を取って「秋」で述べたのだろうか。なぜ「秋は夕暮」なのか。その前に作者がどのように「秋」を捉えているのか知りたい。

秋の自然現象として枕草子では風、虫、月の記述が目立つ。よって諸段にあたりそれぞれの特徴を見ていくことにする。

まず「風」について。

八、九月ばかりに、雨にまじりて吹きたる風、いとあはれなり。

(二八八段)

九月つごもり、十月のころ、空うち曇りて、風のいとさわがしく吹きて、黄なる葉どもの、ほろほろとこぼれ落つる、いとあはれなり。

(二八八段)

兩段とも「風は」の段の一部である。雨混じりの風について、(晩秋の)空を吹く木枯しによつて落ちゆく木の葉の風情についても、どちらも共通していと「あはれなり」と評する。

野分のまたの日こそ、いみじうあはれにをかしけれ。

立藪、透垣などの乱れたるに、前栽どもいと心苦しげなり。大きな木どもも倒れ、枝など吹き折られたるが、萩、女郎花などの上に、よころばひ伏せる、いと思はずなり。格子の壺などに、木の葉をことさらにしたらむやうに、こまごまと吹き入れたるこそ、荒かりつる風のしわざとはおぼえね。

(二八九段)

右の段は、野分が吹いた翌日の庭の描写である。作者は庭先の様子を鋭く観察している。人間の力では容易に動かすことのできない大きな木々を倒し、枝も吹き折ってしまうなど、昨日までの庭とは思えない別世界にかえてしまう風の強さに圧倒されている。しかし、格子を見るとその隙

間には丁寧にも一枚一枚仕切つて木の葉がはさまっているのだ。あの荒かった風のしわざとは思えない、と野分という季節の暴威の中にも優雅な一面のあることを見逃さない^(注12)のである。台風のなしたことの猛々しさと繊細さとを、いみじう「あはれにをかし」と捉えた一段である。

次に「虫」について。

秋になりたれど、かたへだに涼しからぬ風の、所がらなめり、さすがに虫の声など聞えたり。

(二九五段)

秋とは言つてもまだまだ夏の暑さが続き風はなまぬるいが、それでも虫の声が聞こえる。やはり秋は来ているのだなと秋の到来を再確認している。この記述より、「秋」を感じるのに「虫」が重要な役割をはたしているのがわかる。

九月つごもり、十月ついたちのほどに、ただあるかなきかに聞きつけたるきりぎりすの声。

(二九五段)

これは「あはれなるもの」の段の一部である。晩秋ますます寒さが深まっていくころ、耳を澄ませて聞きつけたかすかなきりぎりすの鳴き声は、しみじみとした気持ちにさせるものである。

蓑虫、いとあはれなり。鬼の生みたりければ、親に似て、これもおそろしき心あらむとて、親のあやしき衣ひき着せて、「いま秋風吹かむをりぞ来むとする。待て

よ」と言ひおきて、逃げていけるも知らず、風の音を聞き知りて、八月ばかりになれば、「ちちよ、ちちよ」とはかなげに鳴く。いみじうあはれなり。(四一段)

右段は、「虫は」の段において、秋の代表的な虫の一つである糞虫について述べたものである。親に置いて行かれたとも知らず、約束の秋風の吹く時期になって親を求めて鳴く。その子どもは秋風にゆれるさびしく頼りない姿と心細い気持ちを考えると、胸が痛む。どことなくさびしさを感ぜさせる初秋の空、その中を吹く肌寒い秋風も手伝つて「あはれ」な気持ちにならざるを得ない。

最後に「月」について見ていく。

夜ふけて、月の窓より洩りたりしに、人の臥したりしどもが衣の上に、白うてうつりなどしたりしこそ、いみじうあはれとおほえしか。(二二二段)

九月二十日すぎのころ、長谷寺に参詣して、ほんのちよつとした粗末な家に泊まり、夜更けに見た光景を描いたものである。ここでは、月そのものを賞賛しているのではないが、月光の美を含んだ風情をいみじう「あはれ」と感じている。

以上、三つの自然物を中心に見てきたが、「風」「虫」「月」のどの現象に対しても「あはれ」と評していること

がわかった。これは清少納言の考える秋の季節の特徴と言えるのではないだろうか。――Ⅱ

3. 夏の「月」、秋の「月」

今見てきた「月」は夏の項においても取り上げたが、夏と秋とでは作者の「月」に対する感じ方に少し違いがあるように思う。そのことについて少し触れておく。

月の明かきはしも、過ぎにし方、行末まで思ひ残さることなく、心もあくがれ、めでたく、あはれなる事、たぐひなくおほゆ。(二七四段)

月かげは、いかなる所にもあはれなり。

(一本の二六段)

これらは作者の「月」に対する基本的な考えを述べたものである。作者は月のある時分を情趣に富んでいて、心もさまよい出るほどに感じられ、すばらしいことこの上ないと絶賛しているし、「あはれ」と評しているのがわかる。

しかし、夏の項で挙げた八段、三四段と先に述べたⅡを考えると、作者は夏(残暑)の月を「をかし」、秋の月を「あはれ」と少し区別しているのではないかと思う。

ここで、一本の二五段について考えてみたい。

荒れたる家の蓬深く、葎はひたる庭に、月の隈なくあ

かく澄みのほりて見ゆる。また、さやうの荒れたる板間よりも来る月。荒うはあらぬ風の音。

(一本の二五段)

これについては、能因本^(注13)「あはれなるもの」の段の末尾にはほ同様の内容が見られる。

荒れたる家に葎這ひかかり、蓬など高く生ひたる家に、月の隈なく明かき。いと荒うはあらぬ風の吹きたる。

(二三三段)

ここで「全講枕草子」を見ると、二五段は「あはれなるもの」の一段に対し、晩年増補追記されたものではないかとある。もしそうだとすれば、荒廢した家を照らす月光も「あはれ」と清少納言は言っていることになり、先に述べたことと合わせて考えれば、この段は秋の描写だと言えるかもしれない。

4. 「秋」と「夕暮」

最後に、今まで見てきた秋の特徴を踏まえて「夕暮」について調べていく。「秋は夕暮」と言う作者の心理は何なのか。

経は 夕暮。

(二〇〇段)

これは、夕暮が悲哀的情調と調和するからだと考えられ

る。

日は 入日。入り果てぬる山の端に、光なほとまりて、あかう見ゆるに、薄黄ばみたる雲のたなびきわたりたる、いとあはれなり。

(三三四段)

右段は、第一段と言葉の類似が見られる。太陽が完全に沈んでしまう直前の描写である。あたりはすっかり暗くなつてしまったけれど、山の方に目をやると、わずかに光が残つていく赤く見えている。そこへ薄く黄色がかつた雲が横にたなびいているのは、黒、赤、黄色の色彩の絶妙なバランスと物思いをさせるような情景で、作者に「あはれ」と言わせる。

以上より、作者は「夕暮」を悲哀的情調と調和するもの、「あはれ」なもの、と見ていることがわかる。

先にⅡで述べたように、清少納言は秋の特徴を「あはれ」と捉えている。一日のうちで最も「あはれ」を感じる時間帯は「夕暮」であり、だからこそそこに一番秋らしさを感じ、「秋の夕暮」と言いきったのではないだろうか。

四 冬

冬は早朝。

「冬」について、作者は、

冬は、いみじう寒き。夏は、世に知らず暑き。

(二一四段)

と言う。右の一文は夏の項でも取り上げたが、作者は極寒酷暑を好んでいる。これは、自然のもつとも自然らしいところこそ季節の美感を感じることができると考えているからである。そのことは初段からも読み取れる。

いと寒きに、火などいそぎおこして、炭持てわたるも、いとつきづきし。

(二段)

第一段で人間の動作が描かれているのはこの項だけである。精神的な緊張感、その張りつめた氣に伴う心地よさを見ることが出来る。「いと寒き」だからこそ、普段の冬の朝の準備がより自然にできばきとなされ、それを「つきづきし」と言い、好んでいる。そして、昼になり、ぬるくゆるびもていけば、火桶の火も、白き灰がちになりてわろし。

(三段)

と、緊張感がゆるんだ時の不快感を言う。

それでは、これと似たような段は他にもないだろうか。厳しい寒さだからこそ感じ得る「冬」の美は他にどのようなものがあるだろうか。

1. 極寒に見る諸々の「美」

まず初段に類似するものとして一一六段を挙げる。

正月に寺に籠りたるは、いみじう寒く、雪がちに氷りたるこそをかしけれ。雨うち降りぬるけしきなるは、いとわるし。

(一一六段)

これは真冬の参籠の緊張感を「をかし」と言い、それがゆるんだ時の不快感を「わるし」と言う。

時奏するいみじうをかし。いみじう寒き夜中ばかりなど、こほこほとこほめき、沓すり来て、弦打ち鳴らして「何の某。時丑三つ、子四つ」など、はるかなる声に言ひて、時の杭さす音など、いみじうをかし。

(二七二段)

右は時奏のころの内裏であるが、ここでも「いみじう寒き」である。夜の寒さで五感が冴え、沓のする音や弦の音、人の声などがより感じられる。また役目とはいえ寒さの中忠実に職務を遂行する人たちへの信頼の念も他の季節より深いものがあるのだろう。

除目のころなど内わたりいとをかし。雪降りいみじう氷りたるに、申文持てありく四位五位、わかやかに、心地よげなるは、いとたのもしげなり。

(三段)

これは除目のころの内裏である。やはり設定は「雪降りいみじう氷りたる」である。寒さなどにかまわない前途有

望な青年たちの情熱が、冷氣の中に張るようで快い緊迫感があり、それに対し「いとたのもしげなり」と言っている。

以上、作者が嚴寒を好む理由に、精神的な緊張感、緊迫感、その張りつめた氣に伴う心地よさがあり、またそれゆえに諸々の美が見えてくることが挙げられる。それは「冬」の美であり、「をかし」の美であると言える。

2. 「雪」の美

清少納言は初段で、「雪の降りたるは言ふべきにもあらず」と言っているが、枕草子には「雪」の記述がとても多い。「冬」の美を見ていく中で重要な現象であると思われるため、「雪」の美に迫ってみたい。

降るものは 雪。

(二三三段)

これからもわかるように雪をとても好んでいる。

雪の魅力について述べた文を見てみる。

あてなるもの——略——梅花に雪の降りかかりたる。

(四〇段)

御直衣、指貫の紫の色、雪に映えていみじうをかし。

(二七七段)

賀茂の臨時の祭、空の曇り寒げなるに、雪すこしうち散りて、挿頭の花、青摺などにかかりたる、えも言は

ずをかし。

(二〇六段)

雪こそめでたけれ。「忘れめや」などひとりごちで、しのびたることはさらなり、いとさあらぬ所も、直衣などはさらにも言はず、うへの衣、藏人の青色などの、いとひややかに濡れたらむは、いみじうをかしかべし。縁衫なりとも、雪にだに濡れなば、にくかるまじ。

(二七四段)

梅の花、紫の指貫、挿頭の花、青摺の袍、青色の袍など様々な色に雪がかかると、そのものはより美しくなる。普段不愉快に思っている縁衫の袍ですら認めている。美しいものはより美しく、そうでないものでも相応に美しく演出してしまう雪の魅力である。それは「をかし」の美をかもしだす。

「雪」の魅力はこれだけではない。

めでたきもの——略——庭に雪のあつく降りしきたる。

(八四段)

日ごろ降りつる雪の、今日はやみて、風などいたう吹きつれば、垂氷いみじうしだり、地などこそ、むらむら白き所がちなれ、屋の上はただおしなべて白きに、あやしき賤の屋も雪にみな面隠しして、有明の月の隈なきに、いみじうをかし。

(二八三段)

これらより、雪にはすべてを美しく塗り替え浄化する力があり、それに対して作者は無限の憧れを抱いているようである。

その他雪には、

七日、雪間の若菜摘み、青やかにて、
(三段)

に見るように、巡り来た春の喜びを一層大きくする力もある。

以上、雪の魅力について見てきたが、雪は美しいものより美しく、そうでないものでも相応に美しく演出し、すべてを美しく塗り替え浄化する力をもつ。また、巡り来る春の喜びを一層大きくするものでもある。清少納言はそれに対し無限の憧れを抱いているようであり、「をかし」と評している。

3. 「冬」ならではのあたたかさの美

今まで見てきた極寒の気の緊迫感や雪の清浄感などの他にも「冬」の美を見ていきたい。夏の項では、酷暑の中の清涼感を挙げたが、ここでは逆に、厳しい寒さゆえに諸々のあたたかみ、ぬくもりがより一層心地よく感受される例を見ていく。

雪のいと高う降り積りたる夕暮より、端近う、同じ心

なる人二、三人ばかり、火桶を中にすゑて、物語などするほどに、暗うなりぬれど、こなたには火もともしぬに、おほかたの雪の光、いと白う見えたるに、火箸して灰などかきすさみて、あはれなるもをかしきも、言ひ合はせたるこそをかしけれ。
(二七四段)

雪を配した火桶の感触は「同じ心なる人」との交友関係を無理なく印象づけている。冬の寒さを感じさせず、同じ時をとともに過ごす友とのぬくもり、ふれあいの心地よさを感じる。これは「をかし」の美である。寒さが厳しいほどわずかなぬくもりもより深く心にしみるが、「冬は、いみじう寒き。」にはそういう思いも込められているのかもしれない。

4. 「冬はつとめて」

以上のことをまとめると、作者の求め描いた「冬」とは、精神的緊張感からくる透明な気と清浄な美の世界への憧れ、そして人の心のぬくもりを感じるものであると言えるのではないか。これは「いみじう寒き」中にこそより感受することができ、そしてそれは「をかし」の美であると言える。ここで初段を振り返ると、とても寒い時間帯、雪、炭火を持って行き来する光景……と、それらはすべて右で述べた

作者の求めた「冬」であり、「をかし」の美である。作者は「つとめて」に「冬」を見たのである。

結

春、夏、秋、冬と四季別に各々の美を見てきたが、最後にまとめて終わりにしたい。

「一、春」では、節供を中心に「春」の描写を見ていった。その結果、作者は「春」を清新な感じがするもの、これからはじまる、喜び、期待を抱かせるもの、と捉えていることがわかった。それは「あけぼの」と共通する点が多く、よって一日のうちで「あけぼの」という時間帯に一番春らしさを感じ、「春はあけぼの」と言いきったのではないか、という結論を得た。また、諸段において春は「をかし」の語が多く使われ、それによって「春」の美を表していた。よって「春」の美とは「をかし」の美と言えるのではないかと考えた。

「二、夏」においては「猛暑」がキーワードとなった。作者のいる京都の夏は猛暑ゆえに「夜」がひとしおに心待たれ、暑さからの解放感、清涼感を得る。そのようなとき、月や螢、雨などの美を発見するのである。それは「夏」の美である、夜はそれを感じるのに絶好の機会、「夏は夜」と

言うのである。また、暑い日中にも精神的な清涼感を得ているなど、積極的に「夏」の美を見出していることもわかった。その他、夏は五月の描写が多いことも特徴の一つであるが、大自然の中で「夏」の美を感じ、精神の解放を得るなど積極的に野面を求めている。そして、作者の「夏」に寄せる美意識が、貴族的視界内のものであることもわかった。

「三、秋」について。1. では、初段でなぜ鳥を「あはれ」と言ったのかについて考えた。諸段で鳥を見ていくのに鳴き声に注目したが、作者は鳥を「あはれ」と評価していなかった。しかし、作者が、漢学・漢詩の世界で触れていた鳥——孝鳥也——を思い浮かべ、鳥の飛んでいく背景、時刻、鳥のめぐらへ急ぐ姿や数の減少にしみみとした気持ちになったと考えれば、「あはれ」と言ったのも納得できる。鳥をこのように評価する姿勢に、作者ならではの斬新さがある。鳥でさえ「あはれ」なのだから、みなが評価する雁などは美しいのが当たり前であって「をかし」なのである。そして、日が沈み、風の音、虫の音が聞こえてくるのだが、そのすばらしさも、古歌にたびたび見られるように、はた言ふべきにあらずなのだ。2. では、作者の「秋」の捉え方を調べるため、秋の自然現象として記述の目立つ

「風」「虫」「月」の描写を中心に見ていった。その結果、どの現象に対しても「あはれ」と評していることがわかり、これは作者の考える秋の季節の特徴と言えるのではないかと思う。このようにして見てくると、夏でも秋でも「月」を取り上げていることに気付く。よって3.ではその比較をした。そして、作者は「月」について基本的には「あはれ」と見ているが、夏の月を「をかし」、秋の月を「あはれ」と、多少感じ方の違いがあることがわかった。最後に4.で「夕暮」について調べた。諸段にあたると、「あはれ」と評していることがわかり、これと秋の特徴をあわせて考えると、作者は「夕暮」に一番秋らしさを感じており、「秋は夕暮」と言ったことが理解できる。

「四. 冬」において、作者は極寒を好んでいるので、1.では極寒だからこそ感受できる美を見ていった。それは、精神的な緊張感、緊迫感、その張りつめた気に伴う心地よさである。2.では、初段で触れている「雪」の魅力について見ていった。すべてを美しく塗り替え浄化する力があり、巡り来る春の喜びを一層大きくする「雪」に作者は無限の憧れを抱いているようである。3.では、冬ならではのあたたかさの美について考えた。以上のことを踏まえた上で初段に戻り、作者の挙げた要素を考えると、それらは

すべて作者の求めた「冬」の美であり、「をかし」の美であることがわかる。「つとめて」に「冬」を見たことを確認して4.を終えた。

このように初段を通して諸々の美を見てきたが、「春はあけぼの」「夏は夜」「秋は夕暮」「冬はつとめて」という四季の美に対する鋭い感性と、趣き深い時刻の把握は、巻頭章段にふさわしい優れた描写であることを認識させられた。また、作者の独自の感覚で、既成概念にとらわれず新しい美を発見する姿勢も見ることができた。

しかし、力不足のため、思うように研究が進まずやり残したことが多くある。もつと行間を読み、本文を味わうべきだった、などの反省点が多いが、以上で本研究を終わりとする。

(テキストは、松尾聰 永井和子 校注・訳「日本古典文学全集 枕草子」(小学館)によった。)

注1 尚学図書「国語大辞典」小学館 昭和五十六年十二月

三二頁

注2 松村明・山口明穂・和田利政「旺文社国語辞典」第八

版「旺文社 平成四年十一月 一六頁

注3 池田亀鑑「全講枕草子」至文堂 昭和三十八年二月

三頁

注 4 有精堂編集部「枕草子講座2——枕草子とその鑑賞

I——」有精堂出版 昭和五十年十一月 一一七頁

注 5 田中重太郎「枕冊子全注釈一」角川書店 昭和四十七

年十二月 三三三頁

注 6 沢田正子「第六章枕草子の季と美意識」（『枕草子の美

意識』前篇枕草子の美意識所収）笠間書院 昭和六十年

十月 一三四頁

注 7 同右 四三五頁

注 8 枕草子研究会「枕草子大辞典」勉誠出版 平成十三年

四月 四六〇頁

注 9 同右 四三四頁

枕草子研究会「枕草子大辞典」勉誠出版 平成十三年

四月 四六〇頁

注 10 萩谷朴「枕草子解環一」同朋舎出版 昭和五十六年十

月 九頁

注 11 内田曉子「『枕草子』論攷——「あはれ」をめぐって——」

（大妻国文第27号）所収）大妻女子大学国文学会 平成

八年三月

注 12 同右 四〇六頁

注 13 松尾聰・永井和子「『枕草子』日本古典文学全集11」小

学館 昭和四十七年八月 二五〇～二五一頁

注 14 池田亀鑑「全講枕草子」至文堂 昭和三十八年二月

五八六頁